

蓮ヶ池横穴群

保存整備事業概報Ⅱ

(昭和62年度計測調査概報)

1988

宮崎市教育委員会



史跡蓮ヶ池横穴群航空写真

序

宮崎市は、昭和59年に史跡蓮ヶ池横穴群の保存環境整備事業の実施を決定し、59・60年で基本構想を策定しております。

60年度事業では、横穴の計測調査と一部見学道の設置を行い、61年度は崩壊の著しい12号横穴の保存工事と幹線道路の第1年次建設を実施したところであります。

なお、61年度は、この史跡蓮ヶ池横穴群の効率的な活用と、市民の憩いの場として広く利用される史跡公園建設をめざして、都市計画公園（歴史公園）の事業認可も受けて整備することとなりました。

62年度事業では、60年度の横穴計測調査に続いて、13号～23号の計測調査を実施するとともに、9・10・11号横穴の保存工事及び6～8号横穴前庭部周辺の修景工事、9・10・11・12号それに52号横穴周辺地の修景工事を実施するとともに、見学道設置工事を行っております。

一方、幹線道路の第2年次建設及び駐車場造成工事を行うとともに、都市計画公園事業では、実施設計及び広場造成工事を実施したところであり、本格的な史跡蓮ヶ池横穴群保存環境整備事業が始動したところであります。

なお、本報告書は、計測調査を主体としたものであり、今後の横穴の保存活用に資するものであります。

本事業推進に貴重なご指導、ご助言をいただきました先生方、ならびに作業に従事いただいた方々に感謝いたします。

昭和63年3月

宮崎市教育委員会

教育長 柚木崎 敏

例 言

1. 本書は、史跡運ヶ池横穴群保存環境整備事業にかかる、横穴群の事前計測調査記録の概報である。
2. 計測調査は、昭和62年度に国庫補助、県費補助を受けて、昭和63年1月12日から2月23日までの期間で、宮崎市教育委員会が実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	宮崎市教育委員会		
調査員	文化振興課文化財係	嘱 託	伊 東 但
調査総括	〃	係 長	野 間 重 孝
調査補助	〃	主 事	浅 井 清
横穴保存工事指導	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部		
	遺物処理研究室	室 長	沢 田 正 昭
	〃	文 部 技 官	肥 塚 隆 保
保存環境整備指導	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部		
	保存工学研究室	室 長	田 中 哲 雄
事 務 局	宮崎市教育委員会	教 育 長	柚 木 崎 敏
		教 育 局 長	純 原 啓 次
		文化振興課長	野 田 卓 郎
		課 長 補 佐	長 嶺 信 義
4. 本書の執筆は伊東が行なった。
5. 掲載した図面の実測、トレース及び図版の作成は伊東が行ない一部浅井が補なった。
6. 写真撮影は伊東と浅井が分担し行なった。
7. 横穴墓の保存にかかる事前の調査及び発掘方法については奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理室、沢田正昭室長、肥塚隆保文部技官に指導助言をいただいた。
8. 保存環境整備事業については奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部保存工学研究室、田中哲雄室長に指導助言をいただいた。
9. 本書の編集は、伊東が行なった。

目 次

第1章 序 説	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 立地と環境	5, 6
第2章 調査の結果	
1. 第1集団Dグループ	11
(1)、13号横穴	13, 15
(2)、14号横穴	17
(3)、15号横穴	18
2. 第1集団Eグループ	18
(1)、16号横穴	22
(2)、17号横穴	23
(3)、18号横穴	24
(4)、19号横穴	27
(5)、20号横穴	27
(6)、21号横穴	27
(7)、Eグループ前斜面出土遺物	28
3. 単独横穴	29
(1)、69号横穴	29
第3章 結 語	30, 31

挿図目次

第1図	史跡運ヶ池横穴群位置図	2
第2図	史跡運ヶ池横穴群全体地形図	3, 4
第3図	史跡運ヶ池横穴群分布図(1)	7, 8
第4図	史跡運ヶ池横穴群分布図(2)	9, 10
第5図	13号横穴周辺地形図(Dグループ1)	11
第6図	14・15号横穴周辺地形図(Dグループ2)	12
第7図	13号横穴実測図	14
第8図	13号横穴女室内出土遺物実測図(1)	16
第9図	13号横穴女室内出土遺物実測図(2)	17
第10図	14号横穴実測図	18
第11図	15号横穴実測図	19, 20
第12図	第1集団Eグループ地形図	21
第13図	16号横穴実測図	22
第14図	17号横穴実測図	23
第15図	18号横穴実測図	24
第16図	19・20号横穴実測図	25, 26
第17図	21号横穴実測図	28
第18図	Eグループ前斜面出土遺物実測図	28
第19図	69号横穴実測図	29

図版目次

図版1	13号横穴	33
図版2	13号横穴遺物出土状態	33
図版3	13号横穴女室	34
図版4	14・15号横穴	34
図版5	14号横穴	35
図版6	15号横穴前庭部	35
図版7	15号横穴羨道部	36
図版8	15号横穴女室	36
図版9	第1集団Eグループ	37
図版10	16号・17号横穴	37
図版11	16号横穴女室	38
図版12	17号横穴	38
図版13	17号横穴羨道部	39
図版14	17号横穴女室	39
図版15	18号横穴	40
図版16	18号横穴女室	40
図版17	19号横穴	41
図版18	19号横穴女室	41
図版19	20号横穴	42
図版20	20号横穴女室	42
図版21	21号横穴	43
図版22	21号横穴女室	43
図版23	69号横穴	44
図版24	69号横穴女室	44
図版25	13号横穴女室内出土遺物	45
図版26	13号横穴女室内出土遺物・Eグループ前斜面出土遺物	46

第1章 序 説

1. 調査に至る経過

過去、蓮ヶ池横穴群の所在する丘陵は宅地造成等の開発対象地として、数度候補に上り、これに対処すべく、県教育委員会は昭和44年5月12日より同6月1日までの期間において、国庫補助による緊急発掘調査を実施し、41基の横穴を調査した。⁽¹⁾

そして翌45年6月22日には、都市計画法による第1種風致地区に指定され、さらに翌46年7月17日に国の史跡指定を受け、47年から50年にかけて指定地の公有化を図っている。

これにより、開発による遺跡破壊からは逃れた訳であるが、もともと軟質のシルト岩の相互層に掘り込まれているため、崩落、剥落等の自然破壊は日増しに進行すると言った状況であった。

このため、昭和59年4月、市制60周年記念事業として、史跡蓮ヶ池横穴群保存環境整備事業を推進して行く事となり、昭和60年度は基本設計を策定し、一部見学道を整備、また事業に伴う横穴の保存法を策定するため、第一次の横穴計測調査を実施した。⁽²⁾

この計測調査を基に61年度は12号横穴の前室天井の復元と壁面強化の保存工事を行ない、本年度は9・10・11号横穴の復元工事と2～4、6～8号横穴の壁面強化を行なうと共に、第二次の計測調査を第1集団D・Eグループを中心に行なった。

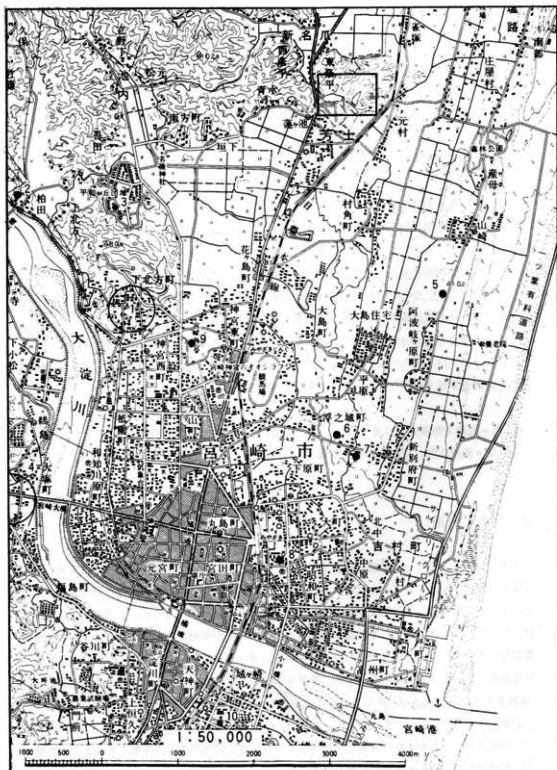
- | | | |
|-----------------------|------|----------|
| (1) 蓮ヶ池横穴群調査報告書 | 1971 | 宮崎県教育委員会 |
| (2) 「蓮ヶ池横穴群」保存整備事業概報Ⅰ | 1986 | 宮崎市教育委員会 |

2. 調査の経過

調査は62年1月12日～2月23日の期間で行ない、昭和44年時には未調査であった前庭部の検出等から開始したが、Dグループの14・15号横穴については急斜面の中腹に穿たれており、15号にあっては削り出しの前庭部が44年時の調査により検出されているため、Eグループ(16、17、18、19、20、21号横穴)を対象に行なった。各横穴の中軸線に沿ってセクションベルトを設定して掘り下げたが、16～19号については羨道口前は急斜面の岩盤となっており、また20、21号前面にも痕跡は認められなかった。Eグループの各横穴はいずれも後世の加工痕が見られ(戦後まもなくまで人々が居住していたことも知られている。)横穴前の堆積土中には下層まで近年の排棄物等が見られた。

この後、支室天井が完全に崩落して埋没していた13号と69号の支室内埋積土を除去し、各横穴の実測図を20分の1の縮尺で作成し終了した。

また、一連の調査の間、Eグループ前の平坦面に試掘トレンチを設定したが地表下約1mまでは削平されており、須恵器の甕小片が数片出土したのみで、何ら遺構は検出されなかった。



1. 下北方古墳群 2. 柏田貝塚 3. 池内横穴群 4. 大淀古墳群 5. 石神遺跡
 6. 浮之城遺跡 7. 榎遺跡 8. 浄土江遺跡 9. 船塚古墳 10. 恒久古墳

第1図 史跡蓮ヶ池横穴群位置図



第2図 史跡蓮ヶ池横穴群全体地形図

3. 立地と環境

史跡蓮ヶ池横穴群は、宮崎市街地の北部、大字芳士字岩永迫に所在し、国道10号線とJ R日豊本線に挟まれた東西約1 km、南北約1.3 kmの丘陵地内に位置する。

この丘陵内には、中池、田池、御諏訪池、稲荷池、蓮ヶ池と呼ばれる5つの溜池があり、この中の蓮ヶ池の名にちなみ、この丘陵付近を「蓮ヶ池」とも呼称される。

この丘陵地は中池、田池によって南北に2分されており、この内北側丘陵の分水嶺より南側11.47 haが国の史跡として指定されている。

指定地には大きく2本の谷間が入り込んでおり、それぞれに延び出す丘陵の南側斜面に横穴の分布が見られ、61年2月の確認数71基から新たに4基増し、現在75基が確認されている。

蓮ヶ池横穴群では昭和44年の発掘調査報告⁽¹⁾において、3集団14グループにグルーピングされているが、その後、第3集団の谷間奥に新たなグループが3グループ(55-59号、60-63号、64-68号)確認され、また前回及び今回の調査で確認された。中央丘陵西斜面の3基(70-72号)の1グループも確認されており、現在、次の様に3集団18グループと、単独の横穴8基で構成されている。

第1集団(指定地内西側の丘陵に分布)

- | | |
|--------------------|------------------------|
| Aグループ(丘陵先端部西斜面に分布) | - 2・3・4・5・22号横穴 |
| Bグループ(丘陵先端部南斜面に分布) | - 6・7・8号横穴 |
| Cグループ(丘陵東斜面に分布) | - 9・10・11・12・52号横穴 |
| Dグループ(丘陵東斜面奥部に分布) | - 13・14・15号横穴 |
| Eグループ(丘陵東斜面支谷奥に分布) | - 16・17・18・19・20・21号横穴 |

第2集団(指定地内中央の丘陵に分布)

- | | |
|--------------------------------------|---------------------|
| Aグループ(丘陵西斜面支谷南側斜面に分布) ⁽²⁾ | - 70・71・72号横穴 |
| Bグループ(丘陵東斜面に分布) | - 24・25・26号横穴 |
| Cグループ(丘陵東斜面下段に分布) | - 27・28号横穴 |
| Dグループ(丘陵東斜面に分布) | - 23・29・30・31・35号横穴 |
| Eグループ(丘陵東斜面上段に分布) | - 36・37・38・39号横穴 |
| Fグループ(丘陵東斜面に分布) ⁽³⁾ | - 32・33・74号横穴 |

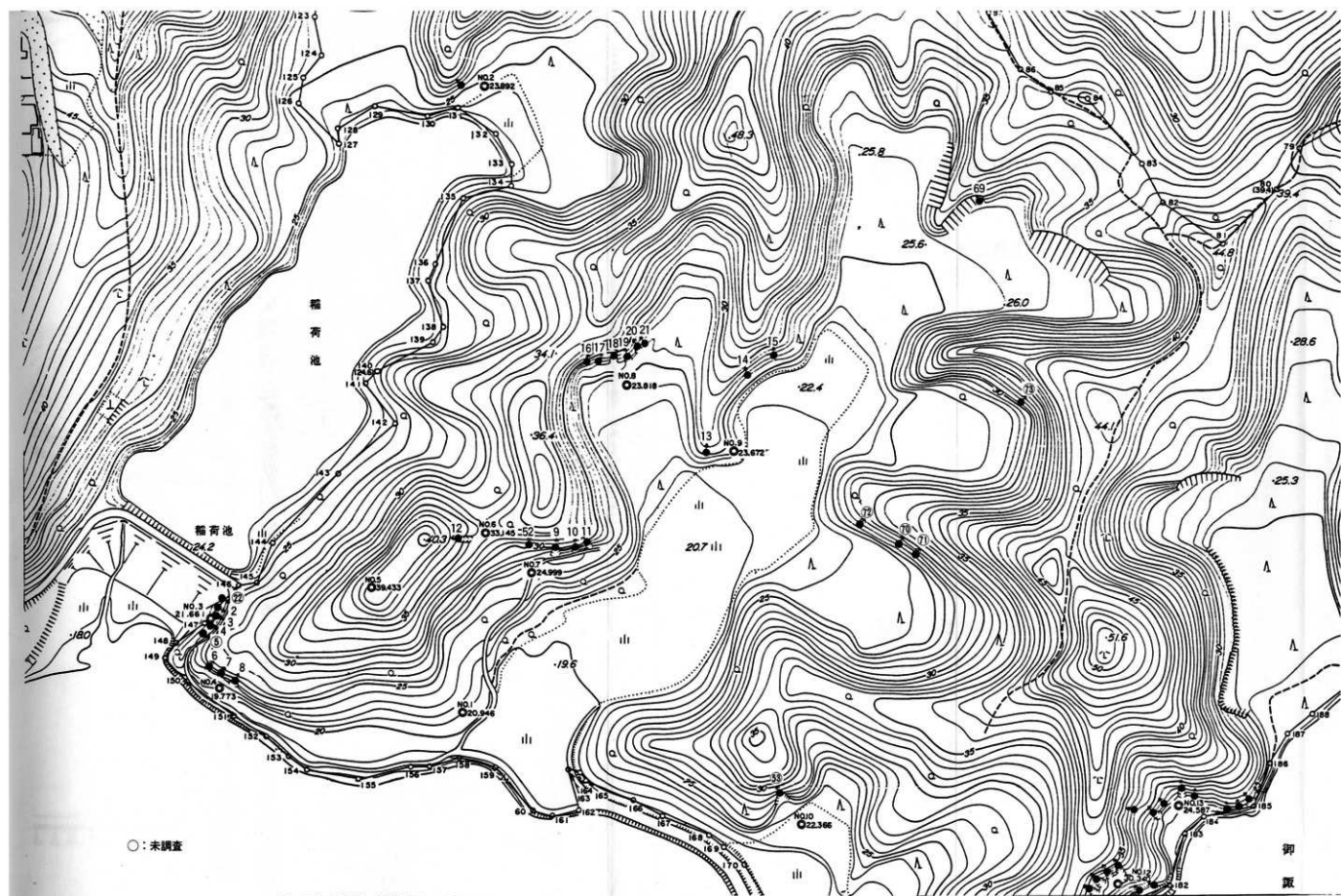
第3集団(指定地内東端の丘陵に分布)

- | | |
|--------------------|---------------------|
| Aグループ(丘陵先端部南斜面に分布) | - 40・41・42・43号横穴 |
| Bグループ(丘陵先端部南斜面に分布) | - 44・50・45・46号横穴 |
| Cグループ(丘陵先端部南斜面に分布) | - 47・48・49号横穴 |
| Dグループ(丘陵内支谷南斜面に分布) | - 55・56・57・58・59号横穴 |
| Eグループ(丘陵内支谷南斜面に分布) | - 60・61・62・63号横穴 |
| Fグループ(丘陵内支谷南斜面に分布) | - 64・65・66・67・68号横穴 |

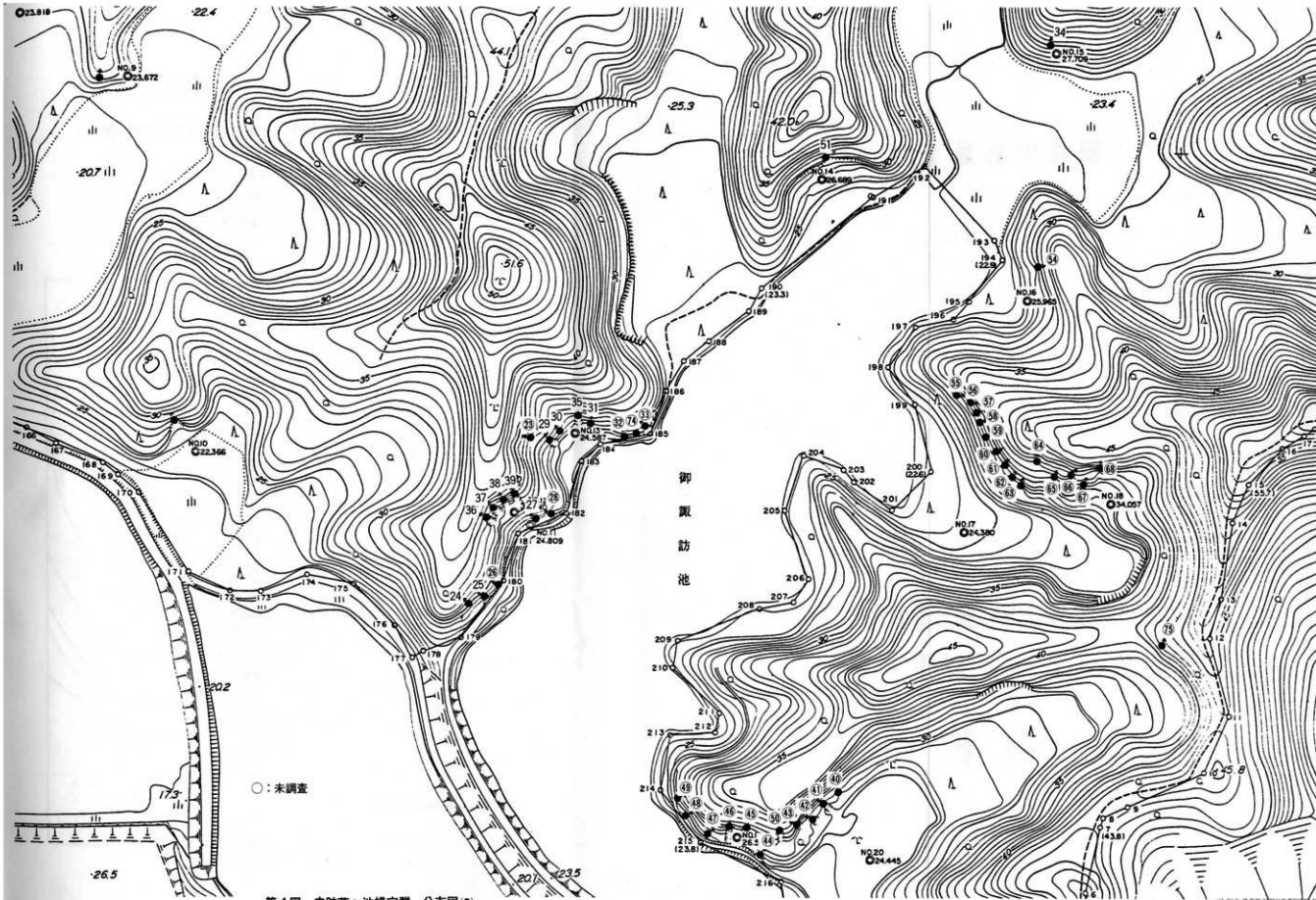
単独横穴

- 1号横穴 — 稲荷池奥の低湿地に延びた小丘陵の先端に位置。指定地からは外れる。
- 53号横穴 — 中央丘陵の南端に位置する。44年調査の報告では、第2集団Aグループの1基としてとらえられている。
- 69号横穴 — 第1集団と第2集団間の谷間奥に位置する。
- 73号横穴 — 指定地内中央丘陵の西斜面の支谷に開口するが、立地条件からは今後グループ化する可能性がある。
- 51号横穴 — 御諏訪池奥の西岸に位置し、急斜面の高い位置に開口している。
- 34号横穴 — 御諏訪池奥の湿地に延びた丘陵の南端に開口している。
- 54号横穴 — 御諏訪池奥の東岸斜面に開口する。
- 75号横穴 — 指定地内東丘陵の尾根近くに開口するもので、現在のところ一番高い標高を持つ。今後グループ化する可能性がある。

- (1) 蓮ヶ池横穴群調査報告書 1971 宮崎県教育委員会
- (2) 昭和44年の調査報告では、中央丘陵南端の22号、23号、53号をAグループとしているが、横穴自体は未調査であり、また近年の調査では一基(53号)しか確認出来ないため、これを単独横穴とし、新たに追加した70号～72号をAグループとしてふり替えた。
- (3) 32号と33号の間に位置し、御諏訪池の水を抜いた際、岸の岩盤に前庭部のカッティングが見られたものである。



第3図 史跡遺ヶ池横穴群 分布図(1)

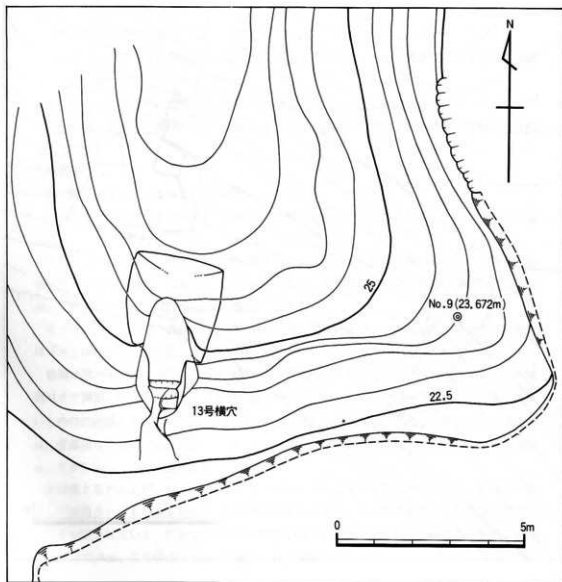


第4図 史跡蓮ヶ池横穴群 分布図(2)

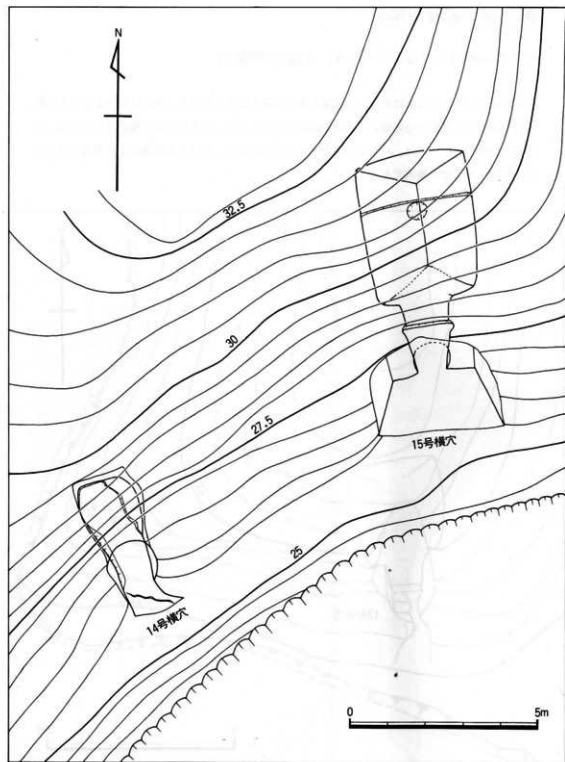
第2章 調査の結果

1. 第一集団Dグループ (第5, 6図) (図版4)

指定地内中央部に谷状に入り込む低湿地奥の西側の斜面に分布し、舌状にのびる小さな尾根の先端部に構築された13号横穴と急斜面の中腹に並んだ14, 15号の3基で構成されている。この内13号横穴については、44年時の調査では里道の関係で、地元との協議により調査を見送ったもので、未調査の横穴であった。



第5図 13号横穴周辺地形図 (Dグループ1)



第6図 14・15号横穴周辺地形図 (Dグループ2)

(1) 13号横穴 (第7図) (図版1、3)

尾根筋に沿って先端部から掘り込まれた横穴で、崩壊が著しく、原形を保っているのは床面と奥壁のみと言った状態である。

玄室床面の標高は約22.5mで、主軸をN-8°-Wにとる。羨道部に深さ約25cmのV字状断面の溝を持ち、この溝を羨道口とすると幅約90cm、長さ約65cmの羨道を持ち、明確に区別されてほぼ長方形の平面を持つ玄室に至る。

玄室の全長は約2.7m、入口部幅約2m、奥壁部幅2.4mを測るが最大高は崩落のため不明である。残存する部分から推定すると玄室の形態は「寄棟造り」であると思われる。

羨道部のV字断面の溝は、閉塞に伴うものと思われるが、現状では閉塞石は見られない。

13号横穴出土遺物 (第8、9図) (図版2)

13号横穴は、昭和44年の調査時には未調査であったもので、今回の調査により多数の遺物が玄室内より出土した。

遺物はすべて土器で、総数は16点、内訳は須恵器13点 (蓋7、坏6)、土師器3点 (坏) である。天井が落下して来たためか、土器は玄室床面に散乱しており、供献位置の推定も不可能である。

須恵器

蓋 (第8図1、2、5~9) (図版25)

出土したすべてにかえりがあるが、小型のA類 (1、2) と大型のB類 (5~9) に分けられる。

1、2は小型の蓋で、いずれも焼成が悪く、青灰色を呈す。頂部に宝珠状つまみを持ち、天井部はヘラ削りを施す。内面のかえりは小さく低い。1は口径8.7cm、受部径11.2cm、器高3.1cm、2は口径8.2cm、受部径10.4cm、器高3.1cmを測る。

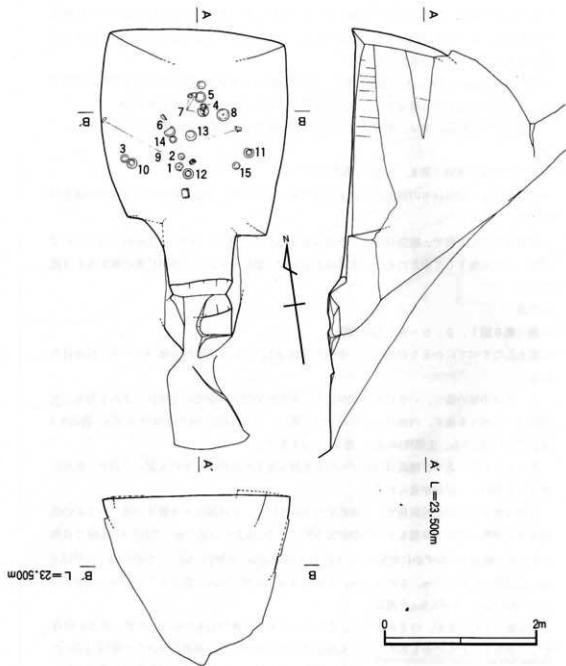
5~8は大型の蓋で、焼成は良好で一部自然軸も見られるが、いずれも歪んでおり、肩部には「×」印のヘラ記号が見られる。

色調は黒みを帯びた暗灰色で、宝珠状のつまみを持ち、天井部はヘラ削りの後、つまみの周囲はナデ調整、内面天井部もナデ調整が施されている。かえりは低いが、歪のため、明確では無いものの口縁面よりわずかに突出する。口径は5が12.2cm、6が11.9cm、7が約12cm、8が12.6cm、受部径は5が14.7cm、6が14.6cm、7が14.4cm、8が15.2cm、器高は5が13.3cm、6が13.2cm、7が13.5cm、8が13.5cmを測る。

9は蓋と思われるが、つまみが無く、またセットとなる身が見あたらないため、あるいは身として使用されたものかも知れない。天井部は平行タタキによる調整を受けその後「||」印のヘラ記号が記されている。内面天井部もナデ調整が施され、かえりは低く口縁面より突出しない。口径は10.8cm、受部径は13.8cm、器高は13.1cmを測る。

坏

坏は小形のもの (A類) と高台を持つ大型のもの (B類) に分けられる。



第7図 13号横穴実測図

環 (第8図3, 4) (図版25)

3, 4は蓋A類(1, 2)とセットを成す身と思われる。いずれも内面底部が凹み、深く立ち上って口縁部はやや外反する。3は4よりやや大型で口径10.9cm、器高3.7cmを測り、底部はヘラ切りの後、ナデ調整される。4は口径9.3cm、器高3.4cmを測り、底部及び体部下は回転ヘラケズリによる調整を受けている。

高台付環 (第8図10, 11、第9図12, 13) (図版26)

いずれも外反する付高台を持ち、外傾し立ち上り、口縁はやや外反する。10-12に「×」、13に「こ」のヘラ記号が底部に施され、蓋B類(5-8)と、それぞれセットを成すものと思われる。

口径は10が13.3cm、11が13.7cm、12が14.2cm、13が13.9cm。底部は10が9.2cm、11が9.4cm、12が8.6cm、13が9.1cm。器高は10が4.6cm、11が4.7cm、12が4.9cm、13が4.4cmを測る。

土師器

環 (第9図14-16) (図版26)

平底から内湾みに立ち上り、口縁部で稜をもって直立する。15, 16は焼成がややあまく器面が風化しているが、3個体共にヘラミガキが施されている様である。

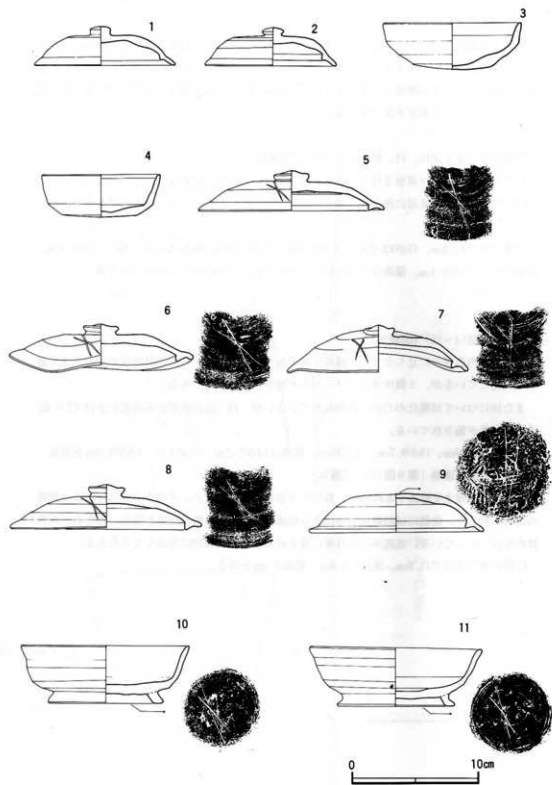
また15については風化のため、認められていないが、14, 16の底部から体部にかけて「×」印のヘラ記号が施されている。

口径は14が10cm、15が9.7cm、16が10cm、器高は14が3.3cm、15が3.5、16が3.3cmを測る。

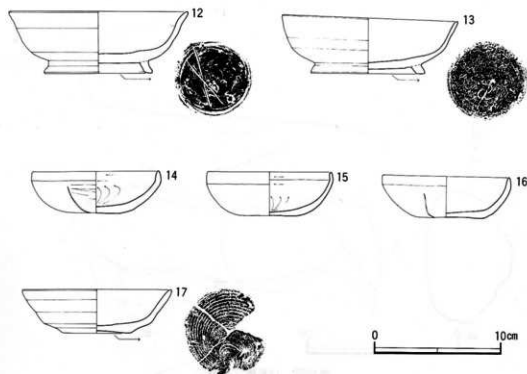
埋積土内出土遺物 (第9図17) (図版26)

玄室内の埋積土を除去する段階で、数片の土器片が出土したが、その中で作図可能な土師器の環を掲載した。底部には回転ネ切りによる痕跡が残り、切り離し位置が低かったため、高台状の底部となっている。底部からは外面に稜を持ちながら直線的に外反して立ち上る。

口径が復元推定で11.9cm、底径が5.4cm、器高3.5cmを測る。



第8図 13号横穴玄室内出土遺物実測図(1)



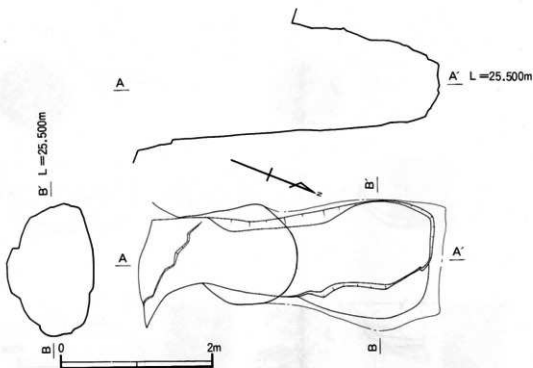
第9図 13号横穴玄室内出土遺物実測図(2)

(2) 14号横穴(第10図)(図版5)

15号横穴と並列し、急斜面の中腹部に構築されたもので、床面の標高24.9m、主軸をN-24°-Wに取る。形態は袋型で全長約4m、最大幅1.7m、最大高1.3mを測る。全体に横穴墓の形態をとっていない小型のもので、昭和44年の調査時は「剥落が多く、原形を止める度合いが少い」と報告されているが、この状態と原形を推定すると異常に小さなものとなり、また遺物も出土していなかった事からも、この横穴は構築途中で打ち切られた可能性がある。

近年の未完成横穴の調査例は熊本県山鹿市城横穴群19号横穴が掲げられ、その構築順序について考察が行なわれているが、15号横穴の場合、羨門は崩落のため明確では無いが、羨道から奥壁位置まで掘り進め、玄室部分を拡張しかけた段階で、何らかの理由により中断したものとされる。

(4) 中村幸史郎「城横穴群」菊地川中流域古墳、横穴群総合調査(2) 1987 山鹿市教育委員会



第10図 14号横穴実測図

(3) 15号横穴 (第11図) (図版 6～8)

14号横穴の東約9mに並列する横穴で、羨道床面標高25m、主軸をN-7°-Wに取り、前幅3.3m、奥幅2.2m、長さ1.6mの台形の前庭部を削り出し、この奥壁に羨門を持つ。

羨道は天井が崩落しているが、中央付近で縁を持って挟まっていたと思われ、幅は約1.1m、長さは羨門口から約2mを測り、明確に区分されてはは長方形の平面を持つ玄室に至る。

玄室の全長は3.9m、入口部幅約2.5m、奥壁部幅2.9m、奥壁部天井高1.92m、入口部天井高1.92mを測る。内面に剝落が見られるが、形態は良く残っている。

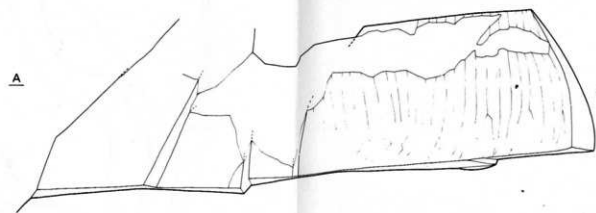
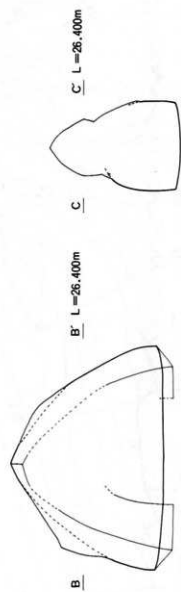
44年の調査時の報告では「四柱を持つ寄棟造り」としてその形態が報告されているが、壁面に残された調整痕は棟線から床面まで連続しており、降棟線に屈折もやや見られるものの、「寄棟造り」の範疇でとらえられるものと思われる。

また床面の奥部1.3mが一段高く造られており、現在確認されている横穴の中では唯一、屍床の施設の確認出来るものである。

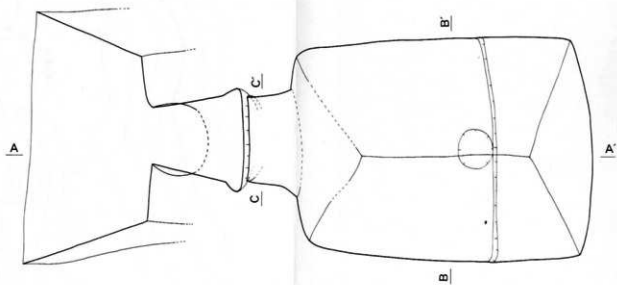
2. 第1集団Eグループ (第12図) (図版 9)

指定地内西端の丘陵東斜面の小支谷内に並列する6基の横穴 (16、17、18、19、20、21号横穴) で構成されるグループである。

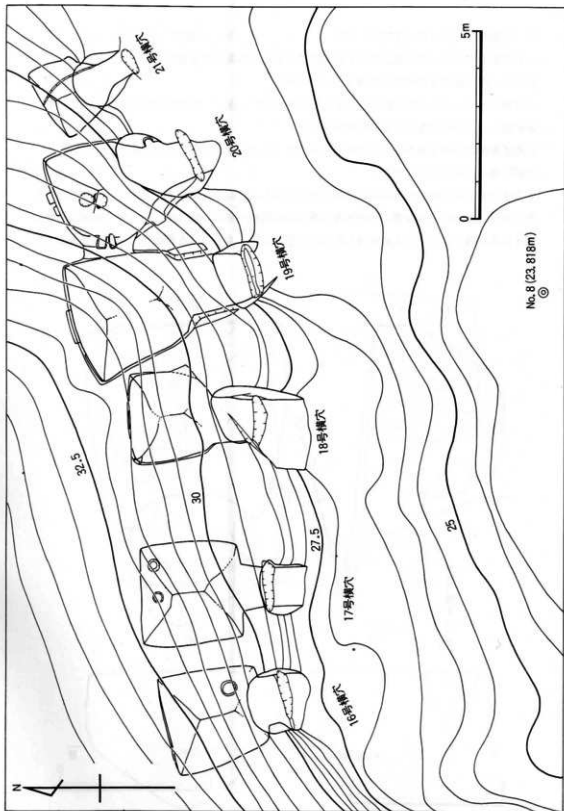
16～18号横穴は斜面中腹に、19～21号横穴はそれより一段低く構築されている。



A' L = 26,400m



第11图 15号横穴式墓图



第12図 第1集団Eグループ周辺地形図

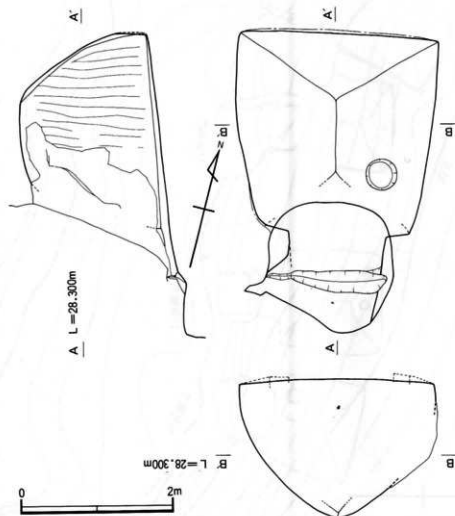
(1) 16号横穴 (第13図) (図版10、11)

Eグループの向って左端に位置する横穴で、羨道口床面の標高は27.1mで、Eグループ中最も高く、開口部前は急斜面の岩盤となっている。

主軸をN-14.5°-Wに取り羨道から掘り込まれているが、羨道から玄室前面にかけては崩落が著しく、原形を推定するのは困難である。

羨道床面には段差があり、ここからを羨道とすると羨道は、幅1.2m、長さ約55cmを測り、明確に区分された玄室に至る。

玄室は入口部の狭まった台形の平面プランを呈し、入口部幅約2m、奥壁部幅2.6m、全長約2.6m、天井高1.8mを測る。側壁及び奥壁にも調整工具痕が残るが、落書きや床面に円形の掘り込みが残り、後世に人が居住したものと思われる。玄室は「寄棟造り」の形態である。



第13図 16号横穴実測図

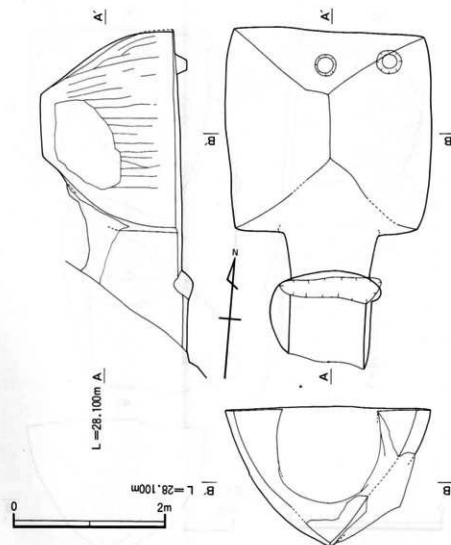
(2) 17号横穴 (第14図) (図版12~14)

16号横穴の隣に開口する横穴で、27.1mと16号横穴と同レベルの床面で開口し、主軸をN-4°-Wに取る。

Eグループの中では比較的良く原形を残した横穴であるが、羨道天井部に後世の加工が見られる。

羨道床面に閉塞用と思われる段差があり、幅約1.1m、長さ60cmの羨道を経て明確に区分された玄室に至る。

玄室の平面形はほぼ正方形で、「寄棟造り」の形態を持ち、全長約2.6m、入口部幅2.4m、奥壁部幅2.5m、天井高1.84mを測る。側壁に調整痕が見られるが、後世の落書きも見られ、また床面にも円形の掘り込みが見られる。



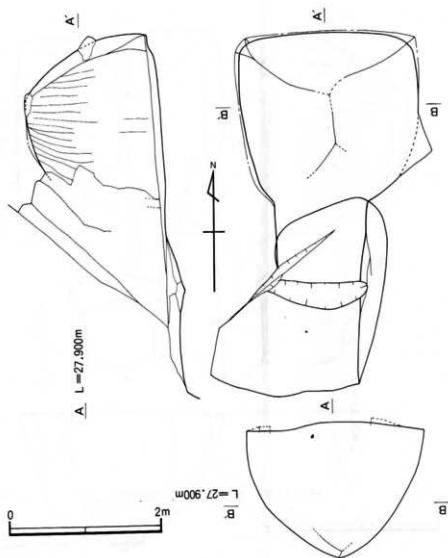
第14図 17号横穴実測図

(3) 18号横穴 (第15図) (図版15、16)

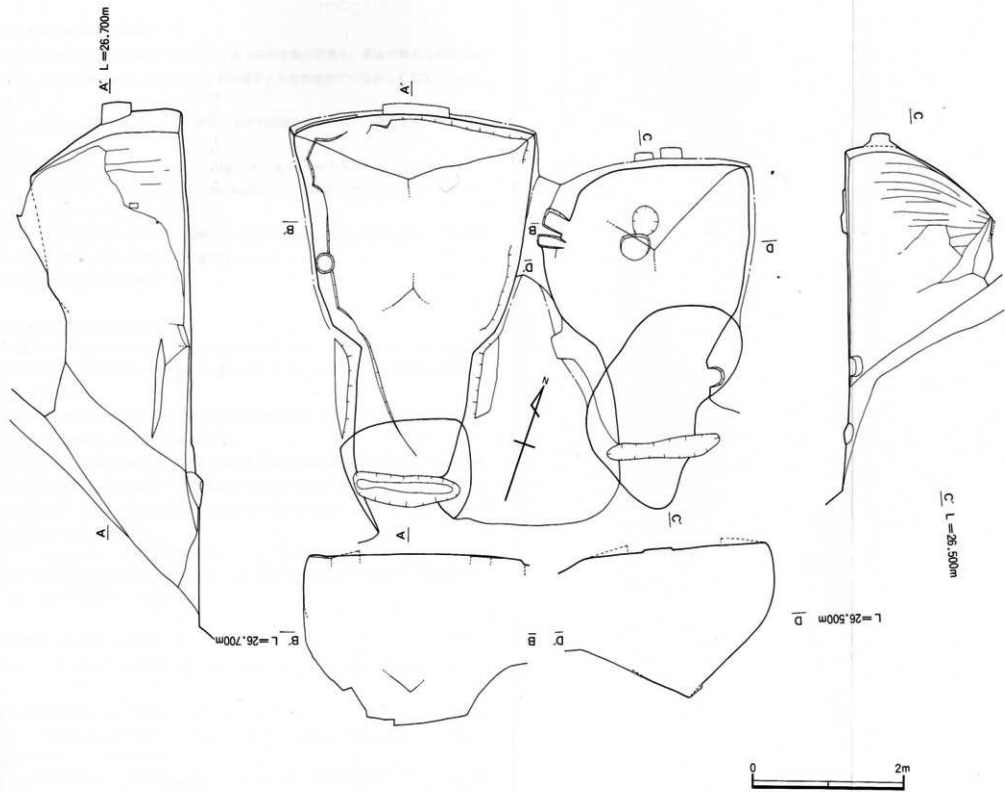
17号横穴に隣接して開口し、16、17号横穴とほぼ同じ標高の26.8mの羨道床面をもち、主軸をN-1°-Wに取る。羨道及び玄室前部が崩壊や拡張を著しく受けており、原形を止めていない。

羨道床面に段差を持ち、幅約1.1m、長さ約1mの羨道から玄室に至るが、後世の拡張により、玄室との境は明確に出来ない。

玄室は全長約2.2m、入口幅約1.6m、奥壁部幅約2.2m、天井高約1.8mを測り、平面形は、入口部の狭まった台形を呈し、「寄棟造り」の形態をもつものである。



第15図 18号横穴実測図



第16图 19·20号横穴实测图

(4) 19号横穴 (第16図) (図版17、18)

Eグループの内、一段低く構築された向って右3基の左端に位置し、床面の標高は約25.6m、主軸をN-17.5°-Wに取る。右に隣接する20号横穴と玄室側壁部でつながってしまっている横穴である。

羨道、玄室共に側壁から天井にかけて崩落や後世の拡張を受けており、特に玄室左壁の破壊が著しい。

羨道部床面に溝状の段差があり、ここから幅1.4m、長さ1.7mの羨道を持って玄室に至る。

玄室は全長約3.2m、入口部幅約2.1m、奥部幅約3.2m、天井高は棟が入口に向けて降っており、奥部で約2m、入口部で1.88mを測る。

玄室の平面形は台形であるが玄門の両袖は外へ開き、羨道との境が明確では無い。「寄棟造り」の形態のもので、床面の周囲に排水溝が巡っている。

8号横穴に良く似た形態の横穴である。

(5) 20号横穴 (第16図) (図版19、20)

19号横穴と玄室内でつながる横穴で、床面の標高約25.4m、主軸をN-23°-Wに取る。

ほぼ全体にわたって崩落や後世の拡張、加工が見られ、特に羨道部の天井から玄室左壁は原形を止めていない。

羨道部床面に溝状に段差が見られ、幅1mの羨道が狭く、玄室の袖が明確で無く、羨道及び玄室の全長は不明で、その区分もつけにくい。

玄室幅約2.7m、天井高約1.9m、羨道から玄室も含めた全長は約3.7mを測り、平面形は撥形に近い羽子板状を呈すが、20号とつながるあたりで広がっておらず、構築中に20号横穴とつながる危険を感じて広げなかったものか、あるいはつながってしまったためにそれ以上掘り進められなかったものと思われる。

いずれにせよ、グループ内での構築順序を考える上で一資料となろう。

玄室自体の形態は大棟の後縁が玄門に向って下っており、平面形からも合わせて推定すると、退化形態にある「寄棟造り」と思われる。

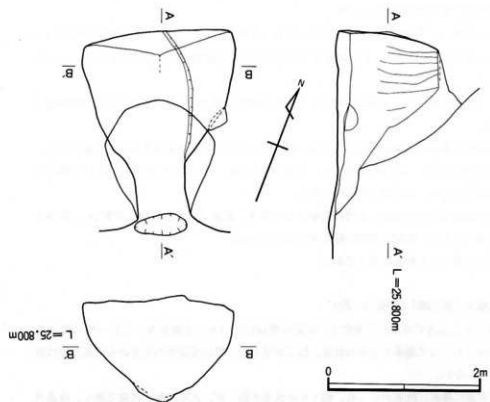
(6) 21号横穴 (第17図) (図版21、22)

Eグループ中、最も左端に位置するもので、玄室前半から羨道にかけて、崩壊著しいものである。

床面の標高は約25.1m、主軸をN-21.4°-Wに取る。

羨道入口部床面に溝状の掘り込みが浅く残り、幅約70cmの羨道が玄室へ延びるが、羨道と玄室の区分明確でなく、奥壁までの総全長2.4mを測る。

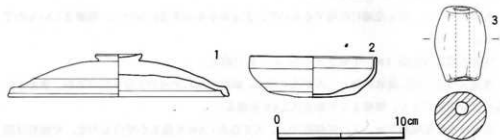
玄室は奥壁部幅約2m、入口部幅約70cm、天井高約1.4mを測る小型のもので、平面形は撥形に近い形態を呈し、側壁には調整工具痕が残る。



第17図 21号横穴実測図

(7) Eグループ前面斜面出土遺物 (第18図) (図版26)

Eグループの前面斜面を調査中、近代の排棄物等と共に出土したもので、いずれも、18号横穴と19号横穴の間の斜面から出土したものである。1は、須恵器の蓋で、ボタン状のつまみを持つ蓋せ蓋式のもので、直径17.6cmを測る大形のものである。2は、須恵器の坏で、底部をヘラズリにより調整されている小型のものである。3は、土鏝で、「蓮ヶ池横穴群—遺物編—」中に掲載されているものと同類のもので、後世持ち込まれたものと思われる。



第18図 Eグループ横穴前面斜面出土遺物実測図

3. 単独横穴

(1) 69号横穴 (第19図) (図版23、24)

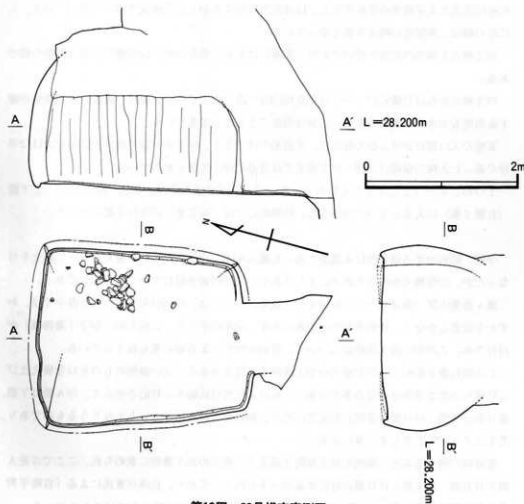
指定地内中央部の湿地奥に開口する横穴で、羨道から支室にかけての天井は崩落し、ほとんど残っていない。

支室床面の標高は約27.4m、主軸をN-14.5°-Wに取り、幅約90cm、長さ約80cmの羨道から明確に区画された支室に至る。

支室の全長は約2.9m、入口部幅約2m、奥壁部幅約2.4mを測り、平面形はほぼ長方形、床面の周囲は排水溝が巡る。

天井部が崩落してはいるが、壁に残る稜線から、支室形態は「寄棟造り」と思われる。

本横穴は、44年時は未調査であったが、支室内には遺物は残存しておらず、河原石がかたまって出土したのみである。



第19図 69号横穴実測図

第3章 結 語

今回、10基を対象に行なった第二次の計測調査も終了し、現在確認されている75基の内、前回も含めて21基の調査が終了し、これにより、22号横穴を残し第1集団はほぼ調査を完了した事となる。

調査は前回同様、計測作業と昭和44年の調査時に行なわれなかった横穴前面の発掘調査を行なった訳であるが、新たな施設等の確認は無かった。

今回、調査を行なった横穴は、グルーピングされているものの、13号、14号、15号、69号横穴については単独的な要素を持つもので、グループとしてとらえられるのはDグループの6基である。

このDグループの横穴についても、本文のとおり形態の違いが認められ、その最も顕著な部分は玄門の両袖である。

Dグループの中で、最も典型的な「寄棟造り」の形式である17号横穴では、平面形を見ると、両袖は羨道と玄室側壁のそれぞれと、ほぼ直角に接するが、16号横穴ではやや開いており、入口の幅は、奥壁部の幅より狭くなっている。

18号横穴も袖部の拡張を受けており、明確にはとらえ得ないが、16号横穴に近い形態の様である。

19号横穴から21号横穴については退化傾向は一段と進んでおり、袖部と羨道、玄室側壁が接する角度も大きく、羨道と玄室の区分は明確でなくなっている。

玄室の入口部分が狭くなる傾向は、平面形だけでなく、16号から18号横穴では床面にほぼ平行であった大棟の接線は、19-21号横穴では羨道に向かって降り始めている。

1つのグループとしてとらえられているDグループではあるが、上段(左側3基)と下段(右側3基)に大きく2つに分けられ、時期的に上段(左3基)の先行を推定出来る。

今回、昭和44年の調査時に未調査であった横穴の内、13号横穴と69号横穴について調査を行なったが、13号横穴からは土器が出土しており、この内須恵器について若干ふれておく。

蓮ヶ池横穴群(指定地内)における出土遺物については、昭和44年発刊の報告書⁽¹³⁾では、わずかな記述しななく、資料不足の感があったが、昭和62年3月、これを補う形で「遺物編」⁽¹⁴⁾が刊行され、この中で出土須恵器について、菅付和樹氏による編年案も組まれている。

この報告書を参照し、13号横穴の出土遺物を対比させると、近い類例のものを44号横穴及び31号横穴の出土遺物に見る事が出来、これにより菅付氏編年に対応させると、環A類はV期、蓋B類はVI期、環B類はVII期に比定されるが、蓋B類と環B類はセットとなりうるものであり、若干のズレが生じてしまう事になる。

他地域の例を見ると、類例を佐土原町土器田3号横穴の出土遺物に求められ、ここでは蓋A類と環B類、蓋B類と環B類に対応するセットが出土しており、長津宗重氏による「宮崎平野部の須恵器編年図(案)」⁽¹⁵⁾に編り込まれ、それぞれV、VI期の時期に当てはめられている。

本稿では蓮ヶ池横穴群における菅付氏編年のV期に環I類がe類と共存する可能性を提示し、蓋環A類をV期、蓋環B類をVI期に比定しておきたい。

- (1) 石川恒太郎、日高正晴 他「蓮ヶ池横穴群調査報告書」 1972 宮崎県教育委員会
- (2) 菅付和樹 他 「琉球文化財調査研究報告書I」 1987 宮崎県総合博物館
- (3) 石川恒太郎、岩永哲夫 他「宮崎県文化財調査報告書第23集」1981 宮崎県教育委員会
- (4) 田中 茂、長津宗重 他「国富町文化財調査資料第4集」 1985 国富町教育委員会



图版1 13号横穴



图版2 13号横穴遗物出土状态



图版 3 13号横穴玄室



图版 5 14号横穴



图版 4 14・15号横穴



图版 6 15号横穴前庭部



図版7 15号横穴羨道部



図版8 15号横穴玄室



図版9 第1集団Eグループ



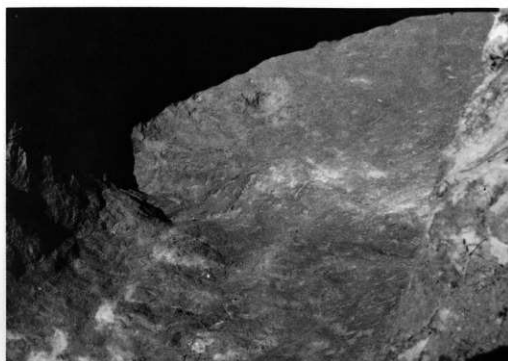
図版10 16・17号横穴



图版11 16号横穴玄室



图版12 17号横穴



图版13 17号横穴通道部



图版14 17号横穴玄室



图版15 18号横穴



图版17 19号横穴



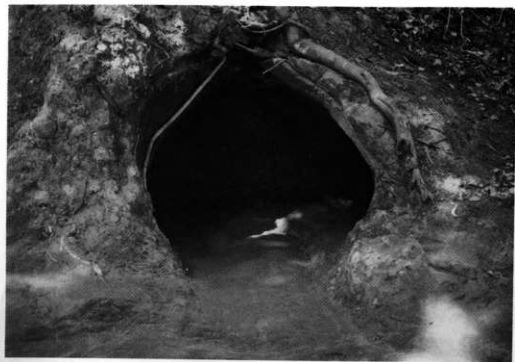
图版16 18号横穴玄室



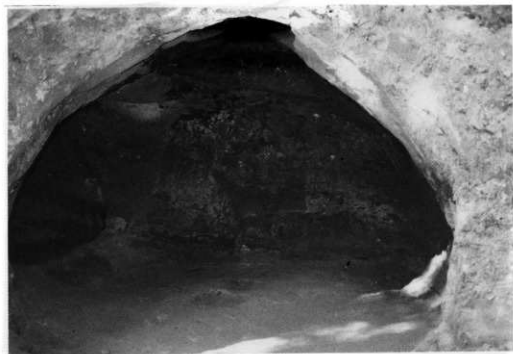
图版18 19号横穴玄室



图版19 20号横穴



图版21 21号横穴



图版20 20号横穴玄室



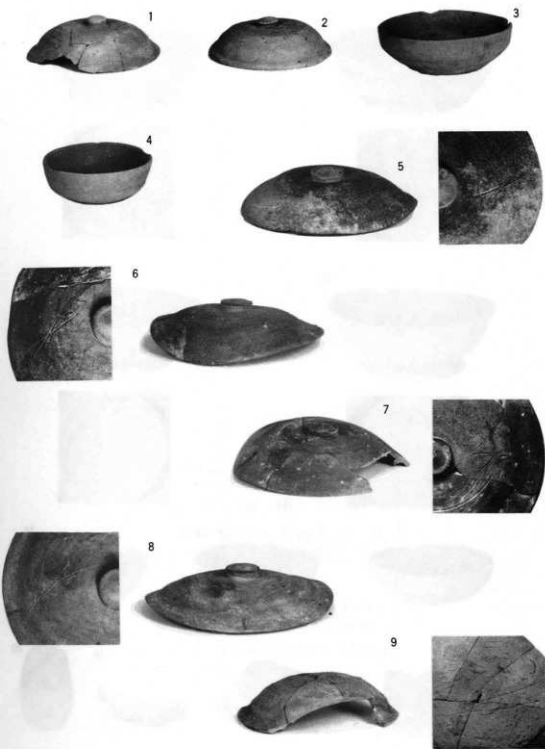
图版22 21号横穴玄室



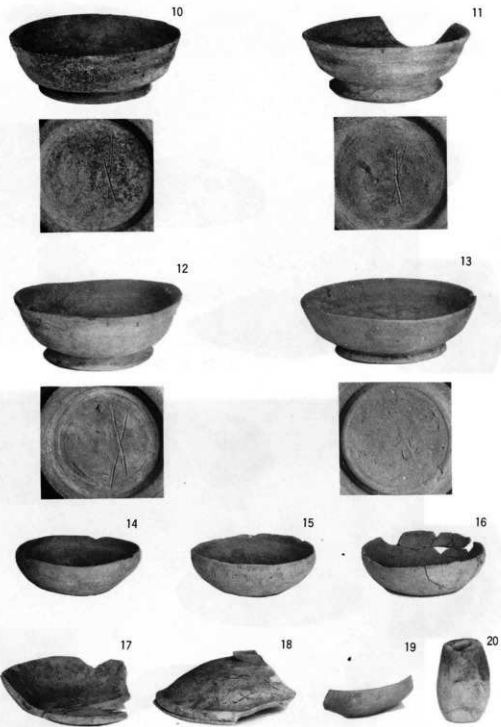
图版23 69号横穴



图版24 69号横穴玄室



图版25 13号横穴玄室内出土遗物



図版26 13号横穴玄室内出土遺物 (10~17)、Eグループ前斜面出土遺物 (18~20)

蓮ヶ池横穴群

保存整備事業概報Ⅱ

(昭和62年度計測調査概報)

昭和63年3月31日

編集・発行 宮崎市教育委員会

印刷 刷合資会社愛文社印刷所

宮崎市高洲町222番地

